

## 《論説》

## 光源氏と山水の風景

一心身の不調からの脱却―

中古文学研究家 朝 日 眞美子

## 1. はじめに

平安時代に成立した物語である『源氏物語』において、光源氏は京の都に生まれた、都育ちの登場人物として設定されている。桐壺帝を父とする光源氏は、政界の中央で活躍する政治家としての道を歩むべく期待されて、源氏として臣籍降下され、その後、中将、大将、太上天皇等を歴任し、准太上天皇にまでになっている。したがって、当時の受領階級の貴族のように地方に下り、都の外で暮らすことは本来、想定されておらず、都の外に出ることは、特別な場合に限られていた<sup>1)</sup>。光源氏が初めて、北山という都の周辺の地に出て、宿泊したのは、<sup>わらわやみ</sup>瘡病の治療のためである。また、光源氏が生涯に一度、須磨や明石という都の外に居を定めて住むことになったのは、政界の情勢が不利になって、京に止まることができないという、危機的とも言うべき政治的理由があったからである。

瘡病の治療のために訪れた北山で光源氏は、聖から加持などを受け、僧坊に一泊する。そして初めて山の朝の風景を見ることで瘡病が癒えている。また、初めて都の外に出て、須磨に住み、ほぼ1年後に明石に移り、<sup>ゆふづくよ</sup>「夕月夜」の海の風景を見ることで、都恋しさに由来する不安定な精神状態を克服している。光源氏にとって、山の風景、海の風景を見ることは、病や精神的苦悩を解決する鍵として、この物語の中で設定されていると考えられるが、このような視点からの、北山・須磨・明石を総合した研究は、管見ながら、まだなされていないようである。

本稿では、光源氏がどのような状況によって、北山・須磨・明石の地に行き、山や海のどのような風景を見たか、またそのことによって、心身の不調はどのように解決されていったかについて検討し、その根本となった考え方について考察する。

## 2. 若紫巻で描かれた北山の風景

光源氏が北山を訪れたのは<sup>わらわやみ</sup>瘡病の治療をするためである。北山の「なにがし寺」<sup>2)</sup>（若紫巻、183頁<sup>3)</sup>）に法力のある修行者（「聖」）がいるという噂を聞き、この聖が高齢で、京まで来ることができないということを理由に、光源氏の方が北山を訪れている。それは暦の上でちょうど春が終わる旧暦3月の末のことで、親しい供人とともに明け方に出かけている。この日、京の都の桜はその盛りを過ぎていたが、北山の桜は

満開であり、その風景は次のように描かれている。

三月のつごもりなれば、京の花、盛りはみな過ぎにけり。山の桜はまだ盛りにて、  
入りもておはするまゝに、あ 霞のたたずまひもをかしく見ゆれば、い かかるありさ  
まもならひたまはず、え ところせき御身にて、あ めづらしう思されけり。

(若紫卷、183～184 頁)

傍線部 c に「ところせき御身」とあり、光源氏はいつも周囲の状況に制限され、自由に振る舞うことのできない高い身分であることが示されている。このような人は、自分の意思のみで都から離れた場所に行くことや、山を登ることも許されてはいない。また、傍線部 b の「ならひたまはず」より、このような出歩きには慣れていないことがわかる。『源氏物語』では、若紫卷で初めて、光源氏が都を離れ、北山で一泊することが描かれている。瘧病の治療ということで、父桐壺帝の特別の配慮がなされたという設定である。

このような状況にある光源氏が北山に登るにつれて感じたことは、まず、都では散ってしまい、花の盛りは過去のことであるのに、北山では桜がまだ咲いていて、都とは違う時間が流れているということである<sup>4)</sup>。次に着目されたのは、傍線部 a 「霞のたたずまひもをかしく見ゆれば」と、霞の様子である。北山に登るにつれて、濃く、すぐ近くに見える霞は、光源氏にとっては別世界のものとして認識され、傍線部 d で「めづらしう」と思っている。

光源氏が北山に登る目的は、瘧病の治療であり、そのためには法力のある修行者である「聖」に会わなければならない。

峰高く、深き岩の中にぞ、聖入りゐたりける。

(若紫卷、184 頁)

この「聖」は、峰が高く、岩に囲まれた奥深い所という、尋常の人間が住むことができないであろう様子でもって居たのであった。おそらくこのような修行者の姿を見ることが光源氏にとっては初めてという設定であったであろう。光源氏は「聖」に対して、名乗ることはしなかったが、「聖」は光源氏の姿を見て、すぐに光源氏と見抜き、「うち笑みつつ見たてまつる」(若紫卷、184 頁)と、笑顔で対応し、瘧病の治療のための加持などを施している。そうしているうちに、太陽が高く上がる頃合いになる。その後も光源氏は勤行をしていたが、夕方になると起こる瘧病の発作が心配なので、その前に供人のすすめで、気を紛らわすために、後方の山に登り、京の都を見渡す。その時の光源氏と供人との会話は次のように描かれている。

はるかに霞みわたりて、四方の梢そこはかとなう煙りわたれるほど、(光源氏)

「絵にいとよくも似たるかな。かかる所に住む人、心に思ひ残すことはあらずかし」とのたまへば、（供人）「これは、いと浅くはべり。人の国などにはべる海、山のありさまなどを御覧ぜさせてはべらば、いかに、御絵いみじうまさらせたまはむ。富士の山、なにがしの嶽」など、語りきこゆるもあり。また西国のおもしろき浦々、磯の上を言ひ続けるもありて、よろづに紛らはしきこゆ。（供人）「近き所には、播磨の明石の浦こそ、なほことにはべれ。何の至り深き隈はなけれど、ただ、海の面を見わたしたるほどなむ、あやしく異所に似ず、ゆほびかなる所にはべる。……」（若紫卷、185～186 頁）

光源氏の目がまず捉えたのは、遠くまで霞がかかっている様子である。北山を登る際にも、霞に着目していたが、ここでは山から見おろすかたちで、霞のかかる風景を見ている。そして、四方の木々の梢が芽ぶいている様子をも、「煙りわたれる」と、まるで緑の煙が立ちこめているかのように捉えている。このような風景を見て、光源氏が持った感想は傍線部 a の「絵にいとよくも似たるかな」というものであり、実際に見た風景であるのに、「絵」という観点からとらえている。この感想は、登山の経験のない光源氏が、初めて見る風景を、都の生活では身近にあった、屏風や襖、扇や絵巻などに描かれた山水画と似ているということを率直に述べたものと思われる。

一方、光源氏の側に居て同じ風景を眺めていた供人は傍線部 b 「これは、いと浅くはべり」と、この風景を平凡だにとらえ、「富士山」などの地方にある雄大な海や山の風景を実際に見れば、光源氏が「絵」を描くことは素晴らしく上達するであろうと言っている。

富士山は『竹取物語』では、不死の薬を焼いたために煙を出し続ける高い山として登場し、『伊勢物語』では東下りの段で、夏でも雪が積もっている高い山として描かれている。また、都良香（承和 1（834）年～元慶 3（879）年）が漢文で書いた「富士山記」（『本朝文粹』巻 12）には、山頂の上を白衣の美女二人が舞ったという古老の伝えが載せられている。『竹取物語』と『伊勢物語』とは、『源氏物語』の絵合巻などにもその名が見えており、当時の物語は絵とともに鑑賞されていたと考えられているので、富士山の姿は絵によって、貴族の間で知られていた可能性が高い。もちろん実際に駿河国方面へ行き、その姿を目にした人はいて、この供人も富士山を見た経験から発言しているのであろうが、一生、富士山の実景を見ずに都で暮らしていた貴族も多かったはずである。光源氏も富士山を実景で見たということは、この物語には書かれていない。したがって、この供人の発言は、光源氏が「絵」で、富士山の姿を知っているという前提で進められたと考えられるのである。

また別の供人は傍線部 d 「播磨の明石の浦」が格別であると言い、播磨国の前国守である明石の入道とその娘（後の明石の君）についての噂話をし、光源氏はその娘に関心を寄せており、後に光源氏が明石に居を移すことの伏線となっている。

夕暮れになって、光源氏は昼間に女性達が住んでいる建物があることに気づいていて、興味を抱いていた「<sup>こしばがき</sup>小柴垣」のもとで垣間見をする。そして尼と女房や、遊んでいる童女の中に十歳ぐらいのかわいらしい少女（後の紫の上）の姿を見出す。顔は泣きはらして真っ赤で、「雀の子を犬君が逃がしつる。…」（若紫巻、190 頁）と残念そうに言う。この少女は母との死別後、祖母の尼君に育てられており、尼君は病氣療養のために、山籠もりをする兄の僧都を頼って、一時、「北山」に来ていた。その時に偶然にも光源氏はこの少女の姿を垣間見、その声を聞いたのである。光源氏はこの少女が藤壺とよく似ていることに気づき、この少女を引き取りたいという思いを強くする。夜になって、僧都からこの少女の素性を聞き出し、藤壺の姪にあたることを知った光源氏は、尼君とも直接話をするが、少女の幼さを理由に光源氏の引き取りたいという申し出は、容易には受け入れられない。

法華懺法の声や滝の音を聞いて夜を明かした光源氏は、次のように夜明けを迎える。

明けゆく空は、いといたう霞みて、山の鳥どもそこはかとなうさへづりあひたり。  
a 名も知らぬ木草の花ども、いろいろに散りまじり、錦を敷けると見ゆるに、鹿の  
たたずみ歩くも、b めづらしく見たまふに、悩ましさも紛れ果てぬ。

（若紫巻、202 頁）

ここでも、やはり「明けゆく空」は「いといたう霞みて」と、霞が先ず描かれ、その霞んでいる度合いが尋常ではないことが、「いといたう」に示されている。ここには山鳥のさえずりが聞こえ、木や草の花が色とりどりに散りまじり、錦を敷いたかに見える所に、鹿が立ち止まったり歩いたりしている。それを光源氏は傍線部 b「めづらしく見たまふに、悩ましさも紛れ果てぬ」というように、「めづらしく」見ることによって、「悩ましさ」が「紛れ果て」ている。

この時の光源氏の心中に目を向けると、光源氏の心は「悩ましさ」が「紛れ果て」たというのであり、「悩ましさ」を光源氏が意識しなくなったというだけのことで、「悩ましさ」が消滅したわけではない。このようなかたちでの解決は、供人が「とかうまぎらはさせたまひて、おぼし入れぬなむ、よくはべる」（若紫巻、185 頁）と、気持を紛らわせて、くよくよと一つの思いにこだわらないことが良いと、光源氏に勧めたことが直接の契機となっている。

この夜明けの風景には「霞」、「山の鳥」、「名も知らぬ木草の花ども」、「鹿のたたずみ歩く」様子など、光源氏が都の生活では見ることのできなかつたものばかりが、列挙されている。北山で初めて目にした風景を「めづらし」と興味を持って「見る」ことが、ともすれば自己の内面的な苦悩にのみ意識が向かうという、心の方向性を妨げている。言い換えれば、見たこともない風景に光源氏の注意が注がれることで、過剰な心の内面への意識を減らすこととなったということになる。そして、その結果、光源氏

の心は外面への興味、内面への意識という点で、バランスのとれた精神状態を得て、瘡病の治癒につながっている。

### 3. 須磨で描かれた絵

光源氏が自ら「須磨」に退去したのは、朧月夜内侍との逢瀬を右大臣に見咎められ、弘徽殿女御の怒りをかったことから、右大臣側から無実の罪に陥れられるのを恐れたことなどによる。その当時、「須磨」はほとんど人が住まず、塩を焼く海人が住み、中納言、在原行平が過去に蟄居したとされた地であった。また、住吉の神の支配する地であり、畿内である摂津国の最も端に位置する地でもあった。

光源氏は紫の上を須磨に同行しようと考えたこともあったが、「さる心細からむ海づらの、波風よりほかに立ちまじる人もなからむに」（須磨巻、202 頁）と、須磨に訪れるものと言えは「波風」しかなく、このような所に若くかわいらしい紫の上は似合わないから、同行したとしても、自分自身も悩むに違いないと思ったことで、紫の上を京の二条院に残すことを決意している。旧暦 3 月<sup>はつか</sup>20日あまりに、数少ない供人と光源氏は出立する。持ち物は簡素で、『白氏文集』などの詩文集や<sup>きん</sup>琴の<sup>こと</sup>琴などであった。

秋の夜には「いと近く」（須磨巻、237 頁）に聞こえてくると表現された浦波は、深夜に独り目を覚まして、波の音を聞く光源氏の立場から次のように描かれる。

御前にいと人少なにて、うち休みわたれるに、一人目を覚まして、枕をそばだてて四方の嵐を聞きたまふに、波ただここもとに立ちくる心地して、涙落つともおぼえぬに、枕浮くばかりになりにつけり。<sup>きん</sup>琴をすこしかき鳴らしたまへるが、我ながらいとすごう聞こゆれば、弾きさしたまひて、

（光源氏）「恋ひわびて泣く音にまがふ浦波は思ふ方より風や吹くらむ」  
と歌ひたまへるに、人びとおどろきて、めでたうおぼゆるに、忍ばれで、あいなう起きみつ、鼻を忍びやかにかみわたす。（須磨巻、237 頁）

ここで光源氏は四方から吹く強い風の音を聞き、傍線部 a「波ただここもとに立ちくる心地して」と、波がすぐ側にまで寄せてきているように感じ、自分が涙を流しているという自覚がないままに、「枕浮くばかり」と泣いていることに気づいている。そして<sup>きん</sup>琴の<sup>こと</sup>琴を少しかき鳴らすものの、弾きさして、傍線部 b「恋ひわびて泣く音にまがふ浦波は思ふ方より風や吹くらむ」という歌を歌う。この歌で光源氏は、須磨の浦波の音と自分が泣く声とが混じり合い、波音と泣き声とが聞き分けられず、泣き声を波音だと聞いていたとし、その理由は波音を立てることとなった風のせいであると歌っている。そして、この波を立てる原因となる風は、ただの風ではなく、「思ふ方」<sup>5)</sup>から吹いてくる風、すなわち光源氏が思う人々が住む都の方から吹いてくるためだとしている。



この歌で光源氏は聞こえてくる波の音までも都の人々との関わりでとらえており、会うことのできない都に住む人々を常に深く思う心があるゆえに詠むことのできた極めて哀切な内容となっている。

この歌を歌い終わった後、供人たちは目を覚まし、涙をおさえきれなくて鼻をかむ。それを見た光源氏は、次のように思い、自分自身の昼間の行動を改めることとなる。

げに、いかに思ふらむ、わが身ひとつにより、親、兄弟、片時立ち離れがたく、  
ほどにつけつつ思ふらむ家を別れて、かくまどひあへる、とおぼすに、いみじく  
て、いとかく思ひ沈むさまを、心細しと思ふらむとおぼせば、昼は何くれと戯  
れ言うちのたまひまぎらはし、つれづれなるままに、色々の紙を継ぎつつ、手  
習ひをしたまひ、めづらしきさまなる唐の綾などに、さまさまの絵どもを書き  
すさびたまへる屏風の面どもなど、いとめでたく、見所あり。人々の語り聞こ  
えし海山のありさまを、遙かにおぼしやりしを、御目に近くては、げに及ばぬ  
磯のたたずまひ、二なく書き集めたまへり。（供人たち）「このころの上手に  
すめ千枝、常則などを召して、作り絵つかうまつらせばや」と、心もとながり  
あへり。なつかしうめでたき御さまに、世のもの思ひ忘れて、近う馴れつかう  
まつるをうれしきことにて、四五人ばかりぞ、つとさぶらひける。

（須磨巻、237～238 頁）

光源氏は家族を都に残して、自分に従って同行してくれた供人たちのことが不憫で  
たまらず、自分が傍線部 a のように、くよくよと悲しみに沈んでいる様子を見ると、  
供人たちが心細いと思うだろうと気遣う。そこで昼間は冗談を言って、皆の気持ちを  
まぎらわし（傍線部 b）、様々な色の紙を継いで古歌などを書き付け（傍線部 c）、い  
ろいろな絵を描くようになる（傍線部 d）。当時の「屏風」には四季の風景や名所など  
が描かれていたので、光源氏は様々な風景を「いとめでたく、見所あり」と見事に描い  
ているのである。

京の都では海や山の風景は「人びとの語り聞こえし」（傍線部 e）と供人の話を聞き、  
「遙かに思しやりし」（傍線部 f）と想像することしかできなかったが、須磨に住むこ  
とによって、その様子を光源氏は自らの目で見ることが可能になっている。そして聞  
いただけでは想像も及ばない磯の景色をこの上なく上手に数多く描くという境地にま  
で達している（傍線部 g）<sup>6)</sup>。ここに「北山」でかつて供人が「地方にある雄大な海や  
山の風景を実際に見れば、光源氏の「絵」は素晴らしく上達するであろう」（前章参照）  
と言ったことが、年を経て須磨で実現されていることがわかる。

この時、光源氏が描いた絵について、供人たちは傍線部 h のように、「千枝、常則」<sup>7)</sup>  
という歴史上に実在した高名な絵師に、「作り絵」をさせたいものだと残念がってい  
る。「作り絵」とは、構図や輪郭線が決定した後、その指示に従って彩色することで

ある<sup>8)</sup>。供人たちがここで残念がっているのは、光源氏の絵を高名な絵師の手で彩色することができないということなのであるから、光源氏の絵は彩色されておらず、「墨がき」と呼ばれる輪郭線を描いたものであったことがわかる。供人たちは、筆に墨を付け、輪郭線を書いた光源氏の絵を、是非彩色したいとは思っているものの、この須磨での暮らしでは無理なことを承知している。このような不自由な中であっても、供人たちは光源氏の「なつかしうめでたき御さま」に「世のもの思ひ」を忘れて、お側近くで仕えていることを「うれしきこと」と感じている（傍線部 i）。

ここで光源氏は、傍線部 c で古歌などを書き付け、傍線部 d でいろいろな絵を描くようになるが、いずれも手本がない状態で、自由に古歌を書き、海辺の風景を観察して絵を描いている。このことは、光源氏が書においても、絵においても堪能であることを示しているが、幼少の時は、手本をもとに古歌を書き、絵を描いていたと考えられ、そのことは次の、光源氏が須磨に退去する前の若紫巻の例からもわかる。

（光源氏は）やがて本にとおぼすにや、手習、絵などさまざまに書きつつ見せてまつりたまふ。いみじうをかしげに書き集めたまへり。（若紫巻、238 頁）

これは光源氏が、自邸に迎えた少女（後の紫の上）の親代わりとして、少女を教育しようとする意図が感じられる場面である。傍線部の「本」とは手本のことで、ここで光源氏は、自邸に迎えた少女のために多くの見事な手本を書いている。これらの手本はもちろん、少女がすばらしい筆跡で歌を書くことや、見事な絵を描くようになるための思つての教育的な配慮から書かれたものである。

このような平安貴族の家庭内における文字や絵の練習は、手本を忠実に写すことから始まるということが、この記述から想像される。その点、須磨での光源氏は昼間に、実際の磯などの風景を見て、それを屏風や紙に写しているので、山水の風景を絵に描く上での本来あるべき道を進んでいると言える。つまり、都育ちで、山水の風景に直接触れる機会が少なかった光源氏が初めて、須磨という地で暮らすことで、手本に頼らず、自分の目で風景を見て描くという経験をしているのである。そして、その絵は供人の心を慰めるものでもあった。常に側にいてくれる供人の心が、都を離れているという悲しみに終始することがないようにと、光源氏は配慮し、悲しみの感情が表に出ないように努めている。このような相互関係によって、須磨での光源氏の生活は継続されている。

#### 4. 明石巻で描かれた「夕月夜」の海の風景

須磨で光源氏が暮らし始めてから、ほぼ一年が経とうとしていた旧暦 3 月上旬、暴風雨が続き、高潮や雷によって疲弊した光源氏はうとうとした時に亡き父桐壺院の夢

を見る。その中で父院は、「住吉の神」の導きのままに、舟で「須磨」の浦から立ち去るようと言う。翌朝、明石の入道が舟で光源氏を「須磨」に迎えに来て、「明石」へと伴う。明石の入道もまた自らが見た「住吉の神」の夢のお告げを信じて行動している。光源氏は畿内（朝廷の支配地域）の端にある「須磨」から、播磨の国という畿外（朝廷の支配地域の外部）の地である「明石」へと移ったこととなる。この地にある明石の入道の居館は、四季折々の風情が楽しめる海辺の家や念仏三昧を行うための堂や豊かな余生を送るための稲を納める倉などがあり、庭の様子は格別で、光源氏は「月ごろの御住まひよりは、こよなくあきらかに、なつかし」（明石巻、270 頁）と、須磨と比べてこの上なく明るく、好ましいと、この居館に愛着を感じている。そして、「京の御文ども聞こえたまふ」（同）と京の人々に、暴風雨のために須磨から明石に居を移したことについて手紙を書いている。また、紫の上から届いていた須磨での暴風雨へのお見舞いの手紙に対して、涙ながらに返書をしたためている。

旧暦 3 月も終わり、旧暦 4 月となり、暦の上での夏を迎えた後に光源氏が見たのが、明石の海を月が照らしている風景である。

四月になりぬ。更衣の御装束、御帳の帷子など、よしあるさまにし出でつつ、よろづに仕うまつりいとなむを、「いとほしう、すずろなり」と思せど、人ざまのあくまで思ひ上がりたるさまのあてなるに、思しゆるして見たまふ。<sup>a</sup>京よりも、うちしきりたる御とぶらひども、たゆみなく多かり。<sup>b</sup>のどやかなる夕月夜に、海の上曇りなく見えわたれるも、<sup>c</sup>住み馴れたまひし故郷の池水、思ひまがへられたまふに、<sup>d</sup>言はむかたなく恋しきこと、何方となく行方なき心地したまひて、<sup>e</sup>ただ目の前に見やらるるは、淡路島なりけり。

「<sup>f</sup>あはと、遙かに」などのたまひて、

（光源氏）「<sup>g</sup>あはと見る淡路の島のあはれさへ残るくまなく澄める夜の月」

<sup>h</sup>久しう手触れたまはぬ琴を、袋より取り出でたまひて、はかなくかき鳴らしたまへる御さまを、見たてまつる人もやすからず、あはれに悲しう思ひあへり。

（明石巻、274～275 頁）

旧暦 4 月 1 日になると、まずこの時代に行われるのは、衣服や調度を夏向きに改める「更衣」である。当時の貴族は、「更衣」は妻がすることが普通ではあるが、ここでは、出家した男性である明石入道がお世話役として、光源氏の装束や部屋にある垂れ絹などを、夏にふさわしく雰囲気の良いものに改めている。傍線部 a「京よりも、うちしきりたる御とぶらひども、たゆみなく多かり」と、京からお見舞いの使いの者が次から次へと訪れているのは、先述したように、暴風雨のために須磨から明石へと居を移した光源氏が手紙を書いていたので、その返書を光源氏のもとに届けるためであろう。須磨退去以来、京からの手紙がこれほど頻繁に来ることが描かれているのはここ



が初めてである。おそらく、京に住む多くの人々からの見舞いの手紙を受け取ることで、光源氏は京の人々と精神的に結び付いているという思いを強めたという心情を描くために、紫式部はこの一文を加えたと思われる。

このような夕方に光源氏が目をとめたのは、傍線部 b「のどやかなる夕月夜に、海の上くもりなく見えわたれる」風景である。傍線部 c では、その風景がまるで京の自邸（二条院）の池のように見えると、ふと思う。すると傍線部 d のように、光源氏の言いようもなくつのっていた恋しくつらい気持ちが雲散霧消する。そして傍線部 e に「ただ目の前に見やらるるは、淡路島なりけり」と、光源氏の海を見渡していた視線は「見やる」と、遠くにある淡路島の方に向けられ、傍線部 f で凡河内躬恒の歌「淡路にてあはと遙かに見し月の近き今宵は所からかも」（『新古今集』巻 16 雑上、題しらず、1515 番）の第 2 句を口ずさみ、傍線部 g「あはと見る淡路の島のあはれさへ残るくまなく澄める夜の月」という歌を詠むことへと続いている。傍線部 h の久しく手を触れることがなかった琴を袋から取り出し、かき鳴らすのは、傍線部 a～g のすべての過程を経て、その後のことである。

ここで注目したいのは、傍線部 b「のどやかなる夕月夜に、海の上くもりなく見えわたれる」風景を、まるで傍線部 c「故郷の池水」（京の自邸、二条院）の池のように見えると、光源氏が思う点である。「夕月夜」は、夕暮れに出ている旧暦 10 日までの上弦の月や、その月の出ている夜のことを意味している。光源氏が「夕月夜」とともに描かれるのは、須磨退去以前には、六条御息所を野宮に訪れる場面（賢木巻）、須磨退去以後では、帰京後、末摘花の常陸宮邸を訪れる場面（蓬生巻）にある。

光源氏が嵯峨野にある野宮に六条御息所を尋ねた時は、旧暦 9 月の晩秋であり、光源氏の姿は「はなやかにさし出たる夕月夜に、うちふるまひたまへるさま、にほひ似るものなくめでたし」（賢木巻、130～131 頁）と描写され、その後、光源氏と六条御息所は歌を詠み交わしている。二人の関係は、葵の上に取り憑いた生き霊が六条御息所であることに光源氏が気づき、葵の上が死去して以来、すっかり隔たっていたが、この夜、光源氏は「めづらしき御対面の昔おぼえたるに、あはれとおぼし乱ること限りなし。来し方行く先おぼし続けられて、心弱く泣きたまひぬ」（同、132 頁）と、六条御息所との昔を思い出して泣いている。そして娘に伴って、伊勢に下向しようとする六条御息所に対して、それを思いとどまるようにと説得し、六条御息所はそのような光源氏に関心を動かされ、一夜を共にしている。ここで「夕月夜」に照らされる光源氏は、六条御息所の心が深く傷ついていることを自覚しながらも、かすかな望みを持って野宮を訪れている。

その後、光源氏は須磨へ退去し、明石へと移り、当該例の「夕月夜」の明石の海を見て、京の自邸二条院の池を思い出しているのであるが、常陸宮邸での「夕月夜」は、光源氏が帰京した後の旧暦 4 月のこととして設定されている。

昔の御ありきおぼし出でられて、艶なるほどの夕月夜に、道のほどよろづのことおぼし出でておはするに、形もなく荒れたる家の、木立しげく森のやうなるを過ぎたまふ。おほきなる松に藤の咲きかかりて、月影になよびたる、風につきてさと匂ふがなつかしく、そこはかとなきかをりなり。……見しこちする木立かなとおぼすは、早うこの宮なりけり。

(蓬生巻、72 頁)

須磨へ退去以前の光源氏は、末摘花の生活のための援助していたのだが、退去後はそれも絶え、帰京してからも光源氏は末摘花のことを忘れていた。そのことを思い出すきっかけとなったのが、月影に揺れて香る藤の花で、この藤は大きな松の木にからまって咲いていた。光源氏はその松の木や木立の様子から、常陸宮邸を思い出し、末摘花を見舞うべきことに気づく。しかし、光源氏は末摘花がまだここで暮らしているのか、また生存しているかも分からず、不安ではあるものの、取り次ぎを依頼し、再会を果たしている。

この蓬生巻の例においても、光源氏はかすかな望みと可能性から、末摘花を訪れたのであり、確信を持っていたわけではない。その点において、先に検討した賢木巻の例における光源氏が、わだかまりを持ちながらも、かすかな望みを持って六条御息所を訪れる場面と同じである。そして、「夕月夜」によって、昔を思い出して、一度は絶えたかに見える関係がある程度に修復されるという点でも同じである。相違点を挙げるならば、賢木巻で「夕月夜」に照らされるのは光源氏であるのに対して、蓬生巻で照らされるのは、荒廃した常陸宮邸であるということである。

藤裏葉巻では、夕霧を婿として迎える、内大臣邸の庭の風景が「七日の夕月夜、影ほのかなるに、池の鏡のどかに澄みわたれり」(287 頁)と描かれている。この内大臣邸の庭の風景は明石浦での前掲例と同じく旧暦 4 月の夏の風景であり、夕月の光はかすかではあるが、池の水は鏡のように澄み渡っているさまが描写されている。これは明石の浦で光源氏が思い浮かべている自邸の池の風景にかなり近い風景であると思われる。内大臣邸の池の規模については不明であるが、光源氏の自邸、二条院の池は大規模なものに設定されていることが、次の記述からうかがわれる。

a 里の殿は、修理職、内匠寮に宣旨くだりて、b 二なう改め造らせたまふ。もとの木立、山のたたずまひ、おもしろき所なりけるを、c 池の心広くしなして、d めでたく造りののしる。  
(桐壺巻、40～41 頁)

傍線部 a の「里の殿」は光源氏の母、桐壺更衣の邸である。祖母が死去し、光源氏が元服した後、父桐壺帝の宣旨が修理職や内匠寮に下り、傍線部 b 「二なう改め造らせたまふ」と、またとないほど立派に改造されている。この邸の庭は以前から、立木や築山

の様子がすばらしかったところに、父帝の宣旨で、傍線部 c「池の心広くしなして」と、池の面を広くするための工事が大々的に行われている。平安時代の庭は、自然の山や海の景を模して造られていたため<sup>9)</sup>、傍線部 d「めでたく造りののしる」とは、海を模した池の周囲には浜辺に見立てた砂を敷くなど、海辺の風景を思わせる本格的な作庭が行われたことを示すと考えられる。

広々とした池水のある庭の例としては、平安時代初期に在位した嵯峨天皇（延暦 5（786）年～承和 9（842）年）の郊外の別業や、源融（弘仁 13（822）年～寛平 7（895）年）の、六条京極大路東の鴨川べりにあった河原院は有名である。河原院の庭は陸奥国塩釜の風景を模して山や池が造られ、毎日、難波の浦から運ばせた海水で塩焼きをしたとされている。この庭を見て詠んだ歌として「塩釜にいつか来にけむ朝なぎに釣する船はここによらなむ」（『伊勢物語』、81 段）<sup>10)</sup>がある。この歌では、河原院の庭の風景を見ながら、「いつ塩釜に来てしまったのか」と、河原院の庭であることを意識しながらも、ここの風景はまるで塩釜ではないか、自分はいつの間に塩釜に来たのだと歌っており、河原院の庭の風景と塩釜の風景とを同一視しようとする考え方が認められる。

このように河原院の庭は、「わがみかど六十余国のなかに、塩釜といふ所に似たる所なかりけり」（『伊勢物語』、同）という、塩釜という地にしかない唯一の風景を、京の地に再現するべく造られ、この庭を訪れる人も、常に塩釜の風景としてこの庭を見ている。

それでは、光源氏が明石の浦で、前掲「のどやかなる夕月夜に、海の上曇りなく見えわたれるも、住み馴れたまひし故郷ふるさとの池水、思ひまがへられたまふに」と、眼前の海の風景と京の自邸二条院の風景を同一視しているのは、河原院における塩釜と同様に、二条院の池が明石浦の風景を模して造られているかということ、この物語にはそのような記述がなく、風景自体のきわだった同一性はないと考えられる。もちろん二条院の池が海辺の風景を模した様であることは、先に検討した通りであるが、海辺の風景の中でも、とりわけ明石の浦の特徴を模して造られたとは考えられないのである。

当該例においては、明石の浦の海と二条院の池との同一性が意識されるのは、旧暦 4 月の「夕月夜」に、海は波もなく穏やかで、遠くまで見渡せる状態であるという、季節と時、夕月の出ている空と海の状態を限定した上でのことである。この光源氏の意識は、1 年以上須磨の浦に滞在し、さらに数週間を明石の浦で過ごして、四季における朝、昼、晩を経験し、須磨で暴風雨や高波の脅威にさらされたことを経て、この日、初めて生じたものである。須磨に居を定めた時の光源氏は、須磨と京との違いに目を向けずにはいられず、悲しみをつのらせており、明石に移った時にその思いはやや緩和されてはいた。この「夕月夜」に光源氏は、明石の風景の中に京の二条院の池との同一性を感じ、京にいる人々の不在による苦しさを感じられなくなっている。それは光源氏の心に訪れた転機といっても良いものである。たとえ、京から遠く離れていても、初

夏の夕月の出ている空と水とがもたらす風景は同じだという普遍的な共通項を認める心が、光源氏の精神を回復させているということもできると思われる。

では、なぜ、光源氏はこのような風景の中にある本質を見極める心を持ち得たのであろうか。その理由は複雑で限定できることではないが、その一つについて考えてみたい。

先に「夕月夜」について検討した際に、須磨退去以前の賢木巻において、「夕月夜」に照らされるのは光源氏であり、須磨、明石を経て、帰京した後に「夕月夜」に照らされるのは常陸宮邸であるという違いがあると述べたが、この違いは、帰京後の光源氏の心の成長という面から解釈できる。すなわち、帰京後の光源氏は目に映る荒廃した屋敷を、ただの朽ちかけた建物と見るのではなく、その木立の有様から、常陸宮邸であると判断し、そこにまだ末摘花が住んでいるのではないかと思いをめぐらせている。ここには、眼前の風景をただの物の集まりと見るのではなく、そこに住む人の窮状をも気遣う想像力がある。それは、目に見える風景を、そのままの物として理解するのではなく、その奥にある大切なものを見つけることのできる力である。その力を、光源氏は須磨に退去して、つらい思いをし、供人に囲まれながら白描の絵を描くことで養っていったことと思われる。供人の心を慰め、海山の風景と対峙して絵を描くことを続けることで、他者を思いやり、本質的なことを見抜き、理解しようと努めたことが、光源氏の心を成長させ、自分自身の心身の不調をも解決することにつながったと考えられるのである。

## 5. おわりに

以上、光源氏が、都の外の風景である北山、須磨、明石の風景をどのように見て、感じ、受け止めているのかについて検討してきた。北山では、僧坊に一泊後、これまで光源氏が見たことのない、霞が立ちこめた朝の風景を見ることによって、瘡病が治癒していた。須磨での光源氏は、都の人々を恋い慕う心が強いために、波や風の音を聞くと、自分の涙や都の人との関わりで捉えるという、極めて哀切な歌をうたったが、そのことで同様に家族と別れて暮らしている供人の心をも苦しめてしまうことに気づく。そして昼間は冗談を言っては気を紛らわし、須磨の磯の風景を見事に描き、自分の心も供人の心も外界に目が開かれるように工夫するようになる。明石では、「夕月夜」の海を見て、自邸の二条院の池を思い出し、都の人々を過剰に恋い慕うために生じる苦しい心の状態を克服する。

このように、光源氏は心身の不調から脱却しているのであるが、これら 3 例ともに、その前に深い「闇」というべきものを実感している所に共通点がある。すなわち、北山で光源氏は、月の出ていない暗い夜に、僧都からこの世の無常などの話を聞き、藤壺との罪を恐ろしく思い、そして少女（後の紫の上）の素性を知り、引き取りたい

という申し出が容易にかなわないという経験をするなど、藤壺を思う自身の心の「闇」を自覚している。また、須磨では第3章で検討したように、秋の夜に、一人波音を聞きながら、琴を弾き、都の人々を思う哀切な歌をうたっており、光源氏は夜の闇の中で、希望が持てず、恋しさがつのっており、彼の心が「闇」に包まれていることが描かれている。明石に移る前の光源氏は、須磨で暴風雨に見舞われ、「雲間なくて明け暮るる日数」（明石巻、259頁）というように雲の晴れ間もない日が重なり、「いとど空さへ閉づるここちして」（同、260頁）と、悲しみに沈む光源氏の心だけではなく、空までもが閉じふさがるような感じがするとあり、雷が光源氏の住む寝殿の廊に落ちた後は、「空は墨をすりたるやうにて、日も暮れにけり」（同、263頁）と、日中であっても闇のようであり、長期間にわたって、闇のように暗い空と、恐怖と不安に苛まれている。

このような「闇」を経験した後、光源氏は北山では明け方の山の風景を見ており、須磨では昼間の海山の風景を見るようになっている。また、明石では海の「夕月夜」の風景を見ることによって、身体や精神の不調から脱却したことが描かれている。これは紫式部が、病や精神の不調というものを、心の内面を過剰なまで意識し、心に「闇」をかかえた結果と捉えていたことに起因するであろう。

平安時代、貴族の人々が郊外の別業に滞在することや、京の都から出て、寺社に詣でて、宿泊するということは、しばしば行われており、藤原道長の『御堂関白記』や藤原実資の『小右記』などの漢文日記に、その実例を見ることができる。『源氏物語』に大きな影響を与えた女流日記『蜻蛉日記』<sup>11)</sup>には、作者の藤原道綱母が石山寺や初瀬寺に詣でた記事の他に、夫の藤原兼家との仲が陰悪になったことから、「鳴滝」という地のある寺に長期間、籠もった末に、兼家の迎えによって自邸に戻されたことが記されている。道綱の母が籠居した鳴滝は、ひぐらし蟬の声や寺の鐘の音や読経の声が聞こえ、木々が生い茂る風景として描かれている。道綱の母は鳴滝の風景の中で3週間程度の日々を過ごし、さまざまな縁者からの訪問と説得の後、夫、兼家へのかたくなな態度を、徐々にではあるが軟化していく。これは、都から離れた山寺の風景によって、心に深い傷をもつ作者が葛藤はありながらも、時間をかけて平常心に近づいていくと位置づけてよい内容であり、風景と心身の関係については『源氏物語』の考え方と同じ基盤にあると考えられる。

「もの思ひに病づく」（若紫巻、196頁）とは、北山の僧都が少女（後の紫の上）の身の上を語った時の言葉である<sup>12)</sup>。これは少女の母が夫や正妻との関係に悩み、「もの思ひ」の末に亡くなったことを言っている。このような、死に結び付く「もの思ひ」という点では光源氏の母、桐壺の更衣も同じである。彼女は「女御、更衣あまたさぶらひたまひける」（桐壺巻、11頁）宮中で嫌がらせを受け、「もの思ひ」（同、14頁）の末に亡くなっていた。光源氏自身もこの物語の中では、「もの思ひ」の多い登場人物とされているのだが、それ故に亡くなるとは設定されていない。危機に際し



て、光源氏には、山や海の風景を見る機会が与えられている。そして過剰な「もの思ひ」を抑え、バランスのとれた精神状態を回復することで、彼を取り巻く状況を好転させている。このような物語を書いた紫式部には、過剰な「もの思ひ」こそが、心身の不調の原因であり、そこから脱却するためには、山水の風景を見るのが有効であるという信念があったと考えられる。その背景には、平安時代の物詣での習慣や、『蜻蛉日記』の鳴滝籠り、山水画や山水を模した庭を理想とする思想などが存在していたことも忘れてはならない。

### 【注・参考文献】

- 1) 『源氏物語』において光源氏は東山（夕顔の亡骸と対面するため、夕顔巻）、嵯峨野の野宮（六条御息所と対面するため、賢木巻）、住吉神社（都への帰還のお礼参り、濡標巻）、石山寺（都への帰還のお礼参り、関屋巻）、嵯峨野（光源氏が造営する御堂がある。明石の君の住む大堰の邸に行くため、松風巻）などに行ったことが描かれている。
- 2) 「北山」にある「なにがし寺」（若紫巻、136 頁）を、「鞍馬寺」、「靈巖寺」、「大雲寺」などの寺にあてはめる説があるが、確定することは困難である。加納重文 2011『源氏物語の舞台を訪ねて』宮帯出版社、第 7 章「北山なにがし寺」（162～184 頁）で諸説の検討がなされている。
- 3) 本文は大島本（池田龜鑑 1956『源氏物語大成』中央公論社）により、表記は適宜改めた。丸括弧の中に主語を示すことがある。頁数は新潮日本古典集成。第 3 章、須磨巻 238 頁傍線部 b については、大島本は「昼は何くれとうちのたまひまぎらはし」であるが、諸本により「戯れ言」を補った。なお和歌の引用は新編国歌大観による。
- 4) 若紫巻における北山についての表現は、新聞一美「源氏物語と廬山—若紫巻北山の段出典考—」2003『源氏物語と白居易の文学』和泉書院 321～365 頁に考察がある。
- 5) この歌の「思ふ方」についての解釈は注釈書によって異なっている。新潮日本古典集成は光源氏が「思う都の方」と解釈し、新編日本古典文学全集は光源氏「のことを思っている人たちのいる都の方」と解釈している。本稿では前者の解釈をとっている。
- 6) この「須磨」で光源氏が描いた絵は、光源氏が都に召還され、政治的に再び勢力を拡大している時に、「須磨の絵日記」として、宮中の「絵合はせ」に出され、光源氏方を圧倒的勝利に導いている（絵合巻）。
- 7) 「千枝、常則」について、『河海抄』は次のように注している。「千枝 常則 在高名録 共以画工也 応和 4 年 4 月 9 日御記云召左衛門志飛鳥部常則図画西廂南壁白沢王像常則名字天曆御記中多在之」（玉上琢彌 1968『紫明抄・河海抄』角川書店より引用）。この記述には「千枝、常則」は共に、歴史上に実在した高名な絵師であること、常則は応和 4（964）年の村上天皇の時代の飛鳥部常則であり、清涼殿の西廂南壁に白沢王像を描いたとある。『権記』には、長保 1（999）年の藤原彰子入内の

調度に「故常則絵」の「倭絵四尺屏風」があったとある。このことから、常則は「倭絵四尺屏風」の絵を描き、長保1年には故人であったことがわかる。その作品は現存しないが、紫式部の時代では、最高の絵師として、絵と共にその名が広く知られていたことが想像される。

- 8) 現存する「作り絵」の作品に、平安時代末期に作成されたとされる国宝『源氏物語絵巻』がある。現在徳川美術館、五島美術館に分蔵されている中でも、五島美術館所蔵の「鈴虫(1)」と呼ばれる絵には、「みす」、「つまと」、「たたみ」などの書き込みがあり、「これらは恐らく下絵を施した主任画家が下彩色を助手にまかせる場合の指示と解されよう」（秋山光和「源氏物語絵巻について」1975『新修日本絵巻物全集』第2巻、角川書店11頁）と考えられている。『源氏物語』のこの例は、「墨がき」が貴族、「作り絵」が絵師の例である。
- 9) 平安時代の庭や河原院については、増田繁夫「河原院哀史」2002『源氏物語と貴族社会』吉川弘文館253～277頁を参照した。
- 10) 『伊勢物語』の引用は、新編日本古典文学全集（福井貞助1994『伊勢物語』小学館）
- 11) 『蜻蛉日記』が源氏物語に与えた影響については、拙稿2016「『源氏物語』帚木三帖の「うつせみ」について—『蜻蛉日記』の「蟬の声」との関わり」『文学史研究』56、80～92頁で論じた。
- 12) 日向一雅2001「源氏物語と病：病の種々相と「もの思ひに病づく」世界」『日本文学』50（5）27～34頁参照。